

日時 二〇一〇年九月四日(土)午後一時～五時三十分

場所 千葉県市川市文学プラザ・生涯学習センター三階

(市川市鬼高一丁目一番四号)

参加人数 三十八名

主催 鳴海英吉研究会実行委員会

(実行委員=芳賀章内 佐藤文夫 鈴木比佐雄 佐相憲一)

〈プログラム〉

司会 佐藤文夫・鈴木比佐雄・佐相憲一

開会の言葉 朝倉宏哉

第一部 講演(司会 佐藤文夫)

演題「鳴海英吉の詩の魅力」上手宰

演題「〈純粹詩〉を創刊した福田律郎」星清彦

演題「私が見た宗左近の横顔」中津攸子

第二部 スピーチと鳴海英吉の詩の朗読(司会 佐相憲一)

玉川侑香、大河原巖、石村柳三、細野幸子、尾内達也、

朝倉宏哉、山佐木進、山岡和範、岡山晴彦、水崎野里子

第三部 今後「鳴海英吉研究会」をどのように発展させるか

鈴木比佐雄

閉会の言葉 佐藤文夫

〈開会の言葉〉

朝倉宏哉 私は朝倉宏哉と申します。本当にお暑期中、今朝の新聞によりますと三十年ぶりの異常気象ということです。ちょっと駅から遠いんですけどもたくさんの方に来ていただいて本当にありがとうございます。鳴海さんがお亡くなりになったのは二〇〇〇年の八月の三十一日、ちょうど丸十年です。実行委員会をたちあげまして、これまでに四回、今日は五回目でございます、鳴海英吉さんに加えまして鳴海さんと親交のありました福田律郎それから宗左近の先達詩人を取り上げまして、三人の詩人の研究会ということになったのであります。福田律郎さんも宗左近さんも市川を拠点に独自の文学を続けられまして、独自の位置を築いた方でございますので今日は非常に市川にゆかりのある三人のバラエティに富んだ面白い会になるんじゃないかと思えます。暑い中ではございますけれども、楽しみながら時間を過ごしたいと思えます。始めます。よろしく願いいたします。(拍手)

〈第一部 研究講演〉

佐藤文夫(司会) みなさんどうも暑い中ごろうさまでした。芳賀章内さんが始めにごあいさつする予定でしたが、ちょっと体調をくずされておりまして外出ができないということです。鳴海さんがなくなりまして十一年目に入りました。二〇〇二年に『鳴海英吉全集』というものができましてその刊行を祝う会というのを市川でやったときに宗左近さんに来ていただいて、話をさせていただきました。その宗さんも二〇〇六年に亡くなりました。三回目の鳴海英吉研究会というのは宗左近さんを偲ぶ会を兼ねて行いました。しかし亡くなったひとつについて語る時、暫時生き返ってその席に現れるのではないかと思います。その都度鳴海さんも何度もこの会場にいらっしやと思います。

今日は最初に鳴海英吉さんについて上手幸さんに、福田律郎さんについては星清彦さん、宗左近さんにつきましては中津攸子さんに話していただきます。このお三人に共通しているのはいずれも戦争と平和に熱い想いをもって、特に福田律郎さんは婚約者が戦争で大火傷されているので、戦争に対する怒りをもっています。鳴海さんは婚約者が戦災で焼け死んだということで、二人とも反戦の強い想いをもっています。宗左近さんも「炎える母」という詩がありますけれども、強い反戦の想いをもっています。もうひとつは三人ともこの市川にご縁がある方々です、宗さんも市川に住んでいました。鳴海さんも昭和二十二年にシベリアから帰って来て十一年間市川で暮らしました。福田さんも中山の法華経の門前に暮らしていらっしやいました。そういう意味でこの三人は非常につながりがある。私ごとになるかもしれませんが、福田さんは、一九六二年に詩人会議というのが発足されて五十四人でスタートしたその一人でした。一九七二年に鳴海英吉さんが詩人会議の会員になられました。それから一九九〇年代には宗左近さんが特別会友になられました。その点は私は格別の想いがあります。

では、第一部の講演で上手幸さんです。上手さんは一九四八年に東京の神楽坂で生まれました、現在六十二歳で千葉の花見川にお住まいです。詩集『星の火事』で壺井茂治賞を受賞され、その後も『追伸』『夢の続き』『上手幸詩集』などを出されています。さらに現代詩の評論などで活躍されています。千葉詩人会議の「滞」というのがありますけれども、そこで鳴海さんへのインタビューもされています。星さんとも共通しているのは一九七四年に千葉大学の哲学科を卒業されました。では、上手さん、よろしくお願いいたします。

講演①「鳴海英吉の詩の魅力」 講師 上手幸

「失業初期には比較的開放感にあふれ、まわりからもうらやましがられていたが、会う人ごとに『仕事は見つかった?』と必ず言われるようになると事態は深刻だった。鳴海英吉が『失業の味がまだまだわかっちゃいない。俺にくらべれば小僧っ子だ』などと言っていたのを無念の涙で思い返すようになる。」(同人誌『冊』3号編集後記から)

私がこれを書いたのは一九七八年十一月ですが、読んだ鳴海英吉さんは「俺も『冊』に入れろ」と葉書を書いて4号には作品を載せています。タイトルは「ナホトカ集結地にて」で「乳」「雪」(定本では「雪<7>」。5号も「ナホトカ集結地にて」で「雪」(『定本』では「雪<8>」)「紅」。6号は「最終陳述」(『全詩集』には未収録)を発表されました。彼はこの頃、すごい勢いでいろいろな詩誌に詩を発表していますが、ほとんどが「ナホトカ集結地にて」だったんですね。これは当時としては奇妙なことでした。というのも、すでに前年の七十七年五月には詩集『ナホトカ集結地にて』がワニプロダクションから刊行され、七十八年度の壺井繁治賞を受賞し、H氏賞でも有力候補になっています。それだけ話題になった『ナホトカ集結地にて』ですから、一区切りが付いたと私には思えました。にもかかわらず鳴海さんは『冊』に入れろ、といって参加してきて、また「ナホトカ集結地にて」を書いているんですね。鳴海さんは一生、ナホトカを書き続けるつもりなのかとったりしました。

それらの全てがまとめられて青磁社から『定本』として刊行されたのが一九八〇年二月。これでやっと『ナホトカ』は一段落したわけです。その「あとがき」はこう書き始められています。「長編組詩 “ナホトカ集結地にて” の連作、作品全篇です。書き始めて六年、準備に数年かかって、やっと完成しました。」またその中ほどでは次のようにも記されています。「ともあれ、シベリヤで死んだ兵士達の慰魂歌を書くつもりはありません。シベリヤの兵士たちの歴史、その生きざま死にざまを記録していくこと

でした。」つまり鳴海さんにとってそれらの詩篇は彼個人のものではなく、シベリヤで死んだ仲間達の声を伝えるという意識が強かったんですね。彼らがもういい、と言っていると感じられなければ、賞をもらったり評価されたからといってそれらの詩を書くことをやめるわけにはいかなかったのだと思います。死後、鈴木比佐雄さんが発見した貴重な「創作日記(A)」ノートには同じ内容のことが書かれています。一部重複しますが引用します。これは発表を意識してのものではなく自己の真実な想いを書いているという意味でとりわけ心打たれるものがあります。「この詩集はシベリヤで死んだ仲間の挽歌ではない。生きること、死ぬことの記録である。実際、鎮魂のうたとしておれが、死んだものたちに何をしてやれるだろうか。出来るとすればそれは凍土のなかの穴に同じく並ぶことしかない。」詩を書いたのは六年プラス数年ですが、体験から数えると三十年以上を経てようやく完成したのです。この詩集から引用されるものはどうしても過酷な状況を描いたものが多くなりますが、今日は目立たない一篇をご紹介します。

花 鳴海英吉

あなたたちに あげるものがないから／この花をあげると ちいさな女の子が言った／大きな外套(シユーバ)をひきずるような格好で／花にそえるような 微笑で言った／もらったおれは とまどってしまい／おいー花くれたあーと 花をふりかざし／花より じゃがいもの方がいい／花より団子で 日本では言うんだ／おれの顔がすすけている／吐く息で眉毛が凍っているようだから／おれの言い方が おこっているように／ひん曲がっていたのか／女の子の眼が くもりはじめると涙をためて／そんなにお腹すいてんの という／けれど わたしの家は貧しいから／わたしは 花より他にあげるものがない

やさしい少女の想いにうろたえて、大人なら分かる茶化し方で“食い物のほうがいい。”と思わず言ってしまったけれど、その言葉をまっすぐに受け止めた少女は自分が貧しくて何もできないことを感じて涙ぐんでしまったというものです。照れる言葉やしぐさは軽く払いのけただけのつもりでも相手の心のどこかに激しく当たって深く傷つけてしまうことがあります。少女の優しさを心の中では受け止めているのにうまく言葉にできなかった悔恨がこの詩にはあふれていて、深い印象を残します。極寒の中での数知れない死や、過酷さゆえに人間が非人間化せざるを得ない状況を無数に体験してきた中にあっても鳴海さんはずっとこの一瞬のことを忘れられずにいたのだといつも思います。鳴海さんの詩、鳴海さんという人間がここによく出ているように思えるのです。

この詩集のタイトルがひとつを除き全て漢字一文字であることはみなさんよくご存知だと思います。『全詩集』では左右に流れる帯のようですが、『定本』では縦横の格子状になっていてそれぞれ美しいですね。それはさらに漢字一字というだけでなく二音であるということは「創作日記(A)」にも書かれています。「それは(同行二人)」ということである。又は(生と死)のことであり。それとも関連して「おへんろ」の詩の重要性を鈴木さんが指摘されています。

話が少しずれるかもしれませんが、私が最近読んだ本(金谷武洋『日本語は亡びない』)によると、日本語の仮名一文字で示される音素(母音一字「あ」、もしくは子音+母音「か」など。拗音は「きゃ」など二文字で表記される)は音韻論的には1モーラ(mora)と言われるそうですが、日本語には2モーラの単語が圧倒的に多く、特に生活に必要な基本的な言葉はそうだというのです。外国語を受け入れるときにも「馬」は「ま」だったものを二モーラにするために「ごう」を付けて「うま」にしたり、同様に「梅」も「め」を「うめ」にしたりして日本語に取り入れてきたというのです。それは言語の防衛機能だと。「はる・なつ・あき・ふゆ・そら・ほし・あれ・これ・それ・いち・じゅう・ひやく・ぼく・きみ・かれ」などキリがありません。その変形として現代では英語発信のものでもパーソナル・コンピュータを「パソコン」、マザー・コンプレクスを「マザコン」など2モーラ×2の単語に吸収してしまう遅さがあるとされるとその通りだだと思います。

これも頭にいれて『ナホト力集結地にて』のタイトルを読むと、漢字一字を使っているけれど、読みは2モーラで、ほとんどが訓読みであることがわかります。最初の部分を見ても「虹・風・河・列・夏・飯・

鳩・北・飢・葦」など。つまり2モーラというのは、漢語の流入以前からの大和言葉の響きだったことにあらためて気付くのです。それぞれが優しい響きの言葉ですが、ページを開けた時にはカチカチに固い漢字が兵士のように整列しているのです。

彼は「創作ノート」で上に書いた「同行二人」を説明する部分の入り口でこんな前振りをしています。「書く時、(丁度失業中)時間はあったので、統一した書き方をした。」ぶっちゃけていうと、ヒマだから凝ってみた、ということでしょう。これと同じことを一九九三年に私ともう一人の方でインタビューした中で(『澤』13号に掲載)彼は語っています。「実は『ナホトカ』を書いたときは俺は失業中なんだよ。子ども部屋に籠もりっきりで書いた。失業の恨み辛みがここに書いてある(笑)。面白いだろ。だから動機というのはすごく単純なんだよ。」。最初に私が引用した、失業については上手は小僧っ子だというのは、このあたりでのごく自信を持っていることがわかります(笑)。

漢字一文字のタイトルで統一していたにも関わらず、最後の章「パート4」で唯一その原則を放棄して平仮名しかも4モーラの「さよなら」一篇を置いたのはなぜなのか、私にはわかりません。ただこの詩が書かれたのは、実は詩集に収められた全ての詩の中でも一九七五年五月と最も早いもののひとつでした。後で自分で課したルールに当てはまらなかったのではないのでしょうか。インタビューでこの詩について彼はこう語っています。

「この詩集の最後に言いたいのは、おれはおまえを忘れないということだけです。この詩が終わりにたすれば、おれは始まりをずっと書いているわけ。今までね。」つまりこの最後の作品はナホトカ集結地から帰国する時に、彼らにさよならを言えるかと自分に問いかけるもので、「おれはおまえを忘れない」という思いを抱きながら自分は帰国するという複雑な心境で書かれたものでした。後半を読みます。

名前ではない いま 誰かがいない／おれは誰かを失いつづけている／顔にふきつける風に 倒れ
そうに洗われ／誰かがいない なにかを失いつづけていると／おれはもう問うのを やめた／さよなら
と言うのを やめた／手をふることもやめた／くちやくちやな煙草に火をつける／火をつけた煙草を
海に投げる／細い煙を上げて 灰色の船体をすべり／煙草はすーと落ちてゆき／波に叩かれて
くだくだになってしまう／ちぎれ軍帽を眉まで下げて／黙ってくだかれる煙草を見ている／最後まで
さよなら と言えないか／最後まで 手をふらないか／さよなら と言わないか／どうしても 言えない
か／おれは黙りきって／煙草を海に投げつづけている

特によく鳴海さんが朗読した詩ですので、彼の声が聞こえて来るようです。投げられている火のついた煙草は線香の煙のようにも見えてきます。

インタビューでは、「今までね」に続き今後の予定を語っています。「実はこの詩集のあとが、もう原稿はまとまってるんだけど、あるんだよ。出さないけど。これはね、まったく極限の状態に置かれた捕虜たちが、農場へ行って、ロシア人と付き合ったりしてだんだん体力を復活していくわけ。八十パーセント発表していない。少しは発表してるけど、詩集で出したほうがいいやと思って発表しないんだ」。私が「たとえば、ロシアの元気なおばさんが出てくる詩なんかけっこう出しているじゃないですか？」と聞くと「そうそう」とうれしそうに答えていました。これがのちの詩集『サカロフスカ国立農場にて』ですが、鈴木比佐雄作成の編註によると玉川侑香さんに送った一冊しか確認されていないということなので幻の詩集ともいうべきものです。『全詩集』にまとめられて今は誰にも読めるようになったことはたいへんありがたいことです。

雪の降るまえに／なだらかな岡 くねった地平線を／見て置こう 雪が降れば埋もれる／サカロフスカ国立農場／地図を おれは書けるだろうか？／地図にもないかも知れない村／忘れたように 静かに雪が積もり／雪が降れば 平らになってしまう／おれ達のように 忘れられるのか／春になるまで 眠れ 死んだとは／言わない あまりにも 雪が白く／死んだように 静かに降るだろう／シベリヤは 耐えているだけだ！／おれ達が 耐えているように……／Ｙ字のところで／後続のトラックが 右折した／あれっ と思ったら 歓声が湧く／頑張ろう！ 向こうから声が掛る／頑張ろう 頑張ろう 頑張ろう……／声もトラックも 小さくなってゆく／手を振る 死ぬなあ!!……………

(「雪の降るまえに」最終二連)

戦勝国の支配者と敗戦国の捕虜という関係よりも、一緒にその土地に暮らした民衆同士の友情と
というようなものがあって、今ふうに言うとは異文化交流にもなっているように思えます。特に女性が元氣
で豊かさの象徴となっています。

ゆうペパンツ 汚した者はいないか／女医(ドクトル)は 言うのである／冗談じゃあねえ 戦争に負け
たから／責任感じて うなだれてらあ！／／全員 ズボンをおろせ ちいさい／全員 左向け左 細い
／健康診断 終わり／全員 三級(オーカ) 軽作業

(「女医(ドクトル)」冒頭)

軽く下ネタで始めていますが、まだ回復していない日本の捕虜達を軽い作業にまわしてくれている
という詩なんですね。この女医は呼吸困難の戦友に樽のように馬乗りになって三時間胸を押し続け
(人工呼吸・心臓マッサージ?)、戦友が回復するとパタンと倒れて大いびきをかいて寝てしまうとい
う豪傑ですが、この詩の最後ではゆさっと一歩前に出て演説します。「同士諸君(タワリシチ)、帰国し
たら日本の女に伝えよ 戦争は 絶対に阻止しよう！男を信じてはいけない」。まさにその通りです。

この詩集に限らず、鳴海さんの詩集は『ナホトカ』の後のごく一部の人の目にしかふれていません。
彼は次々と詩集を出しますが、当時持っていたワープロ専用機で印刷した手作り詩集でした。だから
「インクリボンがボロボロになって使えなくなったら終わり。部数が少ないんであげられないんだよ、
ごめんよ」とよく言われました。私は次々にもらっても、そのたびじっくり読んで感想を書くことができ
ない部類に属していましたので、くれなかつたのは正しい選択だったと思います。十人に詩集を送つた
ら、十人がしっかり読んで感想をくれる、そういう人たちを選んで送っていたんでしょうね。先ほどのイ
ンタビューの中でこんなことを言っています。

鳴海 みなさん詩集を作るのに百万とかかけるけど、おれはお金がないし、馬鹿馬鹿しいと思うか
ら、版下を全部作っちゃう。この『銃の来歴』は一九九〇年発行で二十五万円で作った。詩集を出す
のは大嫌いなんだ。その金があったら新車一台買えるよ。おれはそれより一杯飲んじやった方がい
い。(略)生きた証を表してどうなるのよ。俺は生きているうちにどうい仕事をしたって言ったって、せ
いぜい孫かひ孫ぐらいで終わっちゃうんだよ。

上手 孫まで行きませんよ(笑い)。

鳴海 淋しいじゃん。

上手 淋しいですよ。

鳴海 だから俺は淋しいことはやらないの。こころが鳴海節だよな。

その鳴海さんが亡くなってから十年たっても鳴海英吉研究会で着にされているというのは彼の想像
していなかった展開だと思います。ここに出てくる『銃の来歴』はワープロ印刷のあと増刷しているの
で、中では特殊な詩集です。他はもっと安く作ったはず。仏教の歴史の方面でも彼は大きな仕事
をされていて、彼の著書があまりにプレミアムが付き過ぎてほしい人が手に入らないというので増刷
したというのを聞きました。詩集とどこか似ているなと思います。マホルカ(刻み煙草)を巻く小さな紙
に詩や覚書や仲間がいつどこで死んだというような記録を書いて命の危険を冒して持ち帰った鳴海
さんにとって、文字で書かれた物はとても大事なもので、伝えるべき人に伝えるべきことを残すとい
う信念に貫かれていたように思います。それが詩集の出し方にも表れていたのではないのでしょうか。
ところで実人生の時間軸でいうと『ナホトカ集結地にて』『サカロフスカ国立農場』のあとにくるのが詩
集『舞鶴から』です。シベリヤから帰ってくる最後の地点がナホトカだとすれば、日本に入ってくる入り
口が舞鶴で、そこを舞台とする傑作「接岸」が書かれます。いいなずけのふさ子が走ってくる幻想に
捉えられながら日本に自分が帰ってきたことを確認しようとするのですが、この詩はよく見るとまだ日
本に接岸し終わっていないんですね。「舞鶴港に大拓丸は接岸しつづけている」と本来この動詞には

そぐわない現在進行形の表現を使ったり、最終行も「大拓丸は ゆっくり接岸していく」と未完了なま
ま、薄れていく映画の画面のように終わります。

この詩の不思議さについて考えてみたいと思います。この作品では主人公がふさ子の空襲での死を
知らないものとして書かれていますが、実際には当然ながら知っているわけです。日本に帰ってきて
詩を書くようになった鳴海さんはふさ子の死についての詩をいくつか書いてもいます。「赤提灯」とい
う朗読集団と一緒にやっていたのですが、ふさ子の詩を朗読するたびに彼は泣き出して最後まで読
めないということが何度もありました。戦争体験のない二十代の私たちはいい大人が詩を読んで泣
く、これが戦争なんだと思ったものです。それなのになぜ彼は、死ぬ前の彼女にこれから会えるとわ
くわくして、彼女が腕に飛び込んでくるはずだというふさ子の詩を書いたのでしょうか。

「澄んでいる時間のなかを ふさ子が駆けてくる 長い素足で 息をはずませている 長いおさげ髪だ
な まっ直ぐ駆けてくるが つかまえられる なんてもどかしい接岸 さくら色の唇 白い歯ならびま
で見える そんな近いのに ふさ子 その指先 もう少し伸ばしたら そうだ この若葉の季節 木々
の新しい細い枝 もう少し伸ばしたら つかまえられる」

現実には彼が日本に帰ってくるとふさ子は空襲でむごたらしく死んでいました。鳴海英吉はそれら
の砕け散った世界を描きました。ふさ子についての詩は作者の愛情の深さが伝わる名編ばかりです
が、同時に目を覆いたくなるような惨状も克明に描かれています。しかしそうした世界への彼の帰還
は言葉でいえば「日本上陸」であり「帰国」であり、「引揚げ」ではあっても「接岸」ではありえなかつ
たのだと思います。「接岸」とは彼女への到達を意味していました。彼が「接岸」という言葉で表現したか
ったものは、ふさ子を通じて回復されるべき人間としての幸福、生きていることの素晴らしさ、希望に
ふれるといったようなものだったと思います。ひとつの言葉のなかにそれだけの想いを込められるも
のが詩であることを、改めて感じさせられる詩です。

ふさ子の詩のシリーズをいつかまとめ、その序として「接岸」を考えていたということは創作ノートに記
されています。

「このモチーフは『接岸』という序詩がある。これは未発表のもので長いので発表していないが、これ
から始まった連作だが、いつかまとめるつもりである。しかしいつ書き終わるのか自分でもわかって
いないし書かないかもしれない」

(創作ノート「あるモチーフについての正誤表」)。

シリーズは書き終わってはいなかったと思われるのですが、その遺志を汲んだ鈴木さんたち編集委員
会が『全詩集』の冒頭に〈序詩『ふさ子』に寄せる五篇〉として置かれたことはとても意義深いもので
あると感じています。作者はまた、それがふさ子という個人であるだけでなく横浜空襲で死んだ多くの
死者たちの典型を書いた詩であるとも、この「正誤表」に記しています(この章のタイトルでふさ子に
「」が付けられているのはそうしたことを意識されてのことでしょう)。ただ「おれは確認されない死とい
うものの恐さを感じている。それが書くことにおいて確認することである」とも書いていて、ふさ子とい
う形でしか書けなかったであろうことも示しています。

私はここでもインタビューでの言葉を連想します。

「おれはおまえを忘れないってことだけです。この詩が終わりだとすれば、おれは始まりをずつ
と書いているわけ。ナホトカから日本に出国するとき、シベリヤの死者たちにさよならを言えなかつ
たように、舞鶴に到着したとき、ふさ子に向かって「おれはお前を忘れない」と言っているのだと思
います。ただ始まりと終わりは逆転していて、「この詩が始まりだとすれば、おれは終わりをずつと書
いているわけ」となるような気がします。帰国して知った死んだふさ子を忘れないのではなく、死んで
いないふさ子を忘れないということを書きたかったのではないのでしょうか。それが「接岸」という作品で
はないだろうかと感じます。ふさ子の詩は「五月に死んだ ふさ子のために」「死んだふさ子のための
メーデー」「焼き殺されたふさ子」など、死んだという形容が必ず付きます。それらに対して生きていた
(それは彼の中の夢・幻想であるにしても)生命そのもの、愛そのもの、恋人に触れる瞬間を与えてく

れるもの、もう少し手を伸ばしたらつかまえられる存在としての生きているふさ子への想いを序詩として対置したかったのだらうと想像します。予定ではさらにふさ子の死がたくさん書かれたかもしれませんが、それら全てと釣り合う「始まり」としてのふさ子像をそこに起きたかったのだと。しかし一方で、というべきでしょうか、それゆえにというべきでしょうか、ふさ子へは永遠に接岸できないことを色濃く暗示してしまっていることもこの詩の特徴でもあり、彼の詩の原動力になっていたのかもしれませんが。ここまでふさ子ふさ子と言い続けてきましたが、実人生ではすゑさんというよき伴侶に恵まれて好き勝手に生きることができたようです。彼女は八月十五日が誕生日(それゆえ平和運動の会などで飲んだくれ、まともにお祝いをしていないという)懺悔の詩(「カミさんの誕生日」『裏声で挨拶』所収)がありますが、鳴海さんが舞鶴に到着したのも八月十五日だったということで、よほどその日に縁があるようです。そして彼が亡くなったのは八月三十一日です。何日か前にちょうど十年を過ぎました。

ナホトカはロシア語で「見つけた」(不凍港を)という意味だと詩にありましたが(「雑」『ナホトカ集 地にて』所収)、古典ギリシア語では「見つけた」はヘウレカと言います。それが「エウレカ」となり英語では「ユリイカ」となったのですが、詩人が世界を発見したというのと同じ意味の地名が彼が生きた最も重要な地名であったことに何か不思議なものを感じます。「ナホトカ」と「ヘウレカ」。詩人が発見したものを鳴海さんはこのように私たちに残してくれたのかもしれませんが。「見つけた！」と。あまり多くの詩集にふれることができませんでしたが、以上で終わります。ありがとうございました。

佐藤文夫(司会) どうもありがとうございました。

続いて星清彦さんに福田律郎について語っていただきます。丁度みなさんここへ来るときの途中ですが、昔ニッケの巨大な工場だったんですね。その工場で首切りなどがあったときに福田さんはその支援闘争をしました。活動家ですから、高い塀があったのをその塀からマイクで呼びかけるなどをしたり、ピラをまいて労働者を支援するといったことをしたそうです。

星さんは一九五六年山形県酒田でお生まれになって現在五十四歳です。現在は千葉県の八千代市にお住まいです。高校時代から詩を書かれていて、詩をみていただいた先輩詩人として、伊藤桂一さん、辻井喬さん、といった方々がいらっしゃるそうです。現在は「玄」「覇気」などの同人で個人詩誌を二つだしておられて、「凧」「休憩時間」を発行されています。現在日本詩人クラブ、千葉県詩人クラブに所属されています。詩集も十冊ほどありまして、最近出たのは『ほんのイチミロマネスク』など大変ユニークな詩集をだされています。星さんが福田律郎にとりかかったのは、去年ここでちょうど鈴木比佐雄さんが講演されたときに福田律郎のことを話されたんです。それが「コールサック」六五号に出まして、それを星さんがたまたま見て非常に刺激されたというのがきっかけで、福田律郎の研究にはいったというわけです。非常に資料の少ない詩人なので、大変苦労されたと思います。では、星さん、よろしく願いいたします。

講演②「(純粹詩)を創刊した福田律郎」講師 星清彦

*この講演は、前号「コールサック」(六十七号)の評論を再現したものですので、ここでは割愛します。その代わりに星さんは今号(六十八号)の評論ページにこの講演の続きにあたる新評論を書いてくださいましたので、ぜひそちらを前号とあわせてお読みください。

(編集部より)

佐藤文夫(司会) どうも星さんありがとうございました。丁度われわれにとって興味深いのは、戦後詩を語るときに、「荒地」と「列島」とよく言うのですね。それはそうではなくて、「純粹詩」なんだと。しかもそれを主宰した福田律郎抜きにして語ってはならないと提起されたようで大変すばらしい研究だと思います。今後は福田律郎研究は星さん、とそういう研究家になって下さい。ありがとうございました。

それでは次は「私が見た宗左近の横顔」ということで中津攸子さんです。中津さんは作家として歴史小説、例えば松尾芭蕉とかそういう小説を書かれています。小説、俳句、あるいはエッセイ、といった

非常に幅広い活動をされています。昨年の夏、コールサックから『戦跡巡礼』という本を出されました。各章のタイトルがそれぞれ俳句になっているんですね。戦争の悲惨さ、そして命の尊さという意味を込めた大変いいエッセイ集です。それでは、中津攸子さんよろしくお願いたします。

講演③「私が見た宗左近の横顔」講師 中津攸子

こんにちは。宗左近先生と初めて私がお会いしたのは、先生が昭和五十一年に市川に引っ越して来られて間もなくの講演会でした。男の方ばかりで、私は新聞社の人に誘われて参加しました。その時、宗先生が「なぜ市川に越してきたか」について、千葉県人はおおらかで明るくてこだわりがなく、女の人はおっかさんという感じで頼もしい。それに、市川には桜があり松の木があって、幸田露伴とか永井荷風とか井上ひさしなどの文化人がいて文化が根付いている。と同時に市川は、縄文人の血が流れている、そういうことにひかれて市川にきた、と話されました。

それから市川市文化人展などで宗先生をさらに知るようになりました。曾谷の縄文祭りに行った時のことです。宗先生がいらして、綺麗な月がのぼり、すすきが風にゆれている、そこで炭をおこして、地元の人が麻の衣装を着まして魚を焼いて食べたり栗や芋を食べたり、縄文人の生活の一部を再現するそんなお祭りをしていました。

その時、私は「宗先生は昭和七、八年のお生まれですか」と聞いたのです。そうしたら「えっ」と驚いた顔をされて「とんでもない、大正八年です」とおっしゃったので、「大正八年ですか。でも歷程賞を受賞された『炎える母』という詩はたしか昭和二十年五月の空襲のことを書かれていると思っておりまして」と言いましたら「そうです」と先生は苦笑され、他の方から声がかかってそれ以上お聞き出来ませんでした。

昭和十九年には下は十九歳から上は四十五歳まで国民総動員ということで、動員されていましたから、若い人が家においておかあさんと一緒に空襲で逃げたということが、私は理解できなかったのです。ところが宗先生は「蠟梅」という花の美しさに感動して自然のあり方に反する兵役を忌避したと詠んでいらっしゃるのです。

蠟梅を尊敬したからには兵役を忌避 人役忌避 死役忌避

です。そしてまた、

月天心 役者が自分を演じたか

で自分は戦争中に役者のように自分にあらざる自分を演じ通した、と中天の月を仰ぎながら、戦時中自分は「非国民」であった、戦後ももちろん「非国民」であり続けたという痛烈な痛みを、戦中のよって戦後の非国民縦の雲

と詠んでいます。先生は昭和二十年五月にこの世の地獄である空襲を目の当たりにした当時、先生自身は非国民と言える生活をしていました。志願兵になったり、特攻兵になったり、少なくとも出征したわが子に死なれた母はどんなに悲しくても人々の賞賛がありました。けれど、宗先生のお母さんは戦争を逃げて、お醤油を飲んだり、下剤を常備薬としたり、一日一食しか食べないでやせ細りハムレットや有馬皇子のように精神異常を装って戦争に背を向けている息子と共に暮らしていたのです。五月に大空襲にあった二十年の三月に先生は東大を卒業なさいましたから本当に病気でよろよろして戦の役に立たないような身体の人だけが学校に行ってたようです。

昭和十九年は学徒動員もありましたから、宗先生のお母さんは肩身を狭くし小さくなって生きていたのではないのでしょうか。切ない思いばかりさせたそのお母さんに死なれてしまったのは、ものすごくつらかったと思われれます。

それで『炎える母』という長い作品を書かれたのですけれども、自分は空襲の時に逃げたけれども、お母さんと手を離してお母さんが死んでしまった、それは自分も悪いけれど戦争を起こした世の中が悪い、と他者に責任を転嫁するのが普通ですが、宗先生は絶対に他者に責任を転嫁しないのです。全部自分が引き受けて、人間とはなにか、人間存在とは何か、人はなぜ戦うのかと哲学なさるので。そこにも先生のすばらしさがあります。戦争に行って生還した人が「自分だけが帰ってきてすみません」と死んだ戦友の親を訪ねて謝る、そんな時代に宗先生は生還でなくもともと戦争に行かなかっ

たのです。

友のみな 死に果ててからの 牡丹雪

と先生は詠まれています。友だちが戦でみんな死んでしまっただけが生き残って牡丹雪を見ている。牡丹雪は土に触れれば瞬間に融けてしまう春の雪です。その雪のようにきれいな心をもった友だちがみんな死んでしまった、と深い痛みを抱き、魂を揺るがすような、どんなに叫んでも癒されない悲しみを持ってられる。

ぼろぼろの 地球の包帯 時に 血がにじむ

世の中の全ての価値観がひっくりかえり、一体自分は何を生きたらいいのか分からない、という戦後の大変な混乱期に詠まれた句です。夕焼けは昔から文学の世界では非常に慰められる美しいものとされて来ました。にもかかわらず、夕焼けが「血がにじんだ地球の包帯だ」と詠む宗先生の痛みの何という深さでしょう。

その波の すべての咽び泣き 響(ひびき)灘(なだ)

波の音をはじめ自然の奏でる音に人は普通慰められるものですが、響灘の波の音全てがむせび泣きだと感じられる宗先生の心の痛み。

雪の闇 月影という 刀傷

刀傷というのですから、細い月がでているのです、その月を見て、刀傷だと感じる心、雪が地上を覆って居ればそれだけでも明るいものですが、その明るささえ闇と感じられるのは進むことも退くことも出来ない、がけつづちで生きることも死ぬことも出来ないような、喘ぎの世界に先生はいらっしゃるからです。私も高校時代に、月を見るときれいだと思ってしまうのですが、そのきれいさがこの世の中の汚さと比べたら、きれい過ぎて、このきれいさは嘘だ、あの月の空々しい美しさを暴いてやりたい、というような荒れ果てた心を持っていました。そして、月をそのように見た文学者はいないなあと思ってみました。宗先生はそういう心の苦しさを凝視なさっていらしたのです。

天の川 永遠とはただ 浮かぶもの

この世の中はみんな実体だ、実存だと思っているけれども、ただ単に現象があるだけで、本質を追求していけば本質はなく、ただ漂うものである。それは大宇宙全て、天体全て、人間も含めて全てのものがただ単にこの宇宙を漂うものである、と宗先生はそう思われていたのです。宗先生の、

ない存在 こそが存在 虹の夜

という句は、つきつめていくと全ての存在はこの世にただ漂うものであるのに、なぜ人間は執着して、やれ戦だやれ金だとあたふたしているのだろう。存在とは夜の虹のようなもの。と宗先生は痛みを感じながら、現実の美しさに眼を向けず。そして目立たないけれども美しい夜の虹にちなんで人を幸せにする行いをした人を顕彰しようと「夜の虹賞」を市川に作って下さり、沢山の人を表彰なさいました。また文化を育もうと「市民文化賞」を創設され、その第一回の奨励賞を私はいただき本当に励まされました。

何年前でしょうか、市川ケーブルが新年の特別番組で宗先生と私の対談を企画したのです、その時先生は縄文人がこういうのを作っているのですよ」と縄文の杯を二つ持っていらして私にお酒をついで飲ませていただきました。

縄文時代はまだ山々が噴火していましたから、その生命誕生の場所である火山の炎を土器にあらわした縄文の人たちの生命エネルギーの強さ、平和、限りない愛を溢れさせていた縄文の文化を通して、過去と現在を繋ぐ愛のひと筋の糸を宗先生は見い出されたのではないのでしょうか。先生の魂は人も人の心も幻のようなもので、いつかは消えてしまう現実をきちんと見られ、その現実を突き抜けてさらに奥なる真実の生、そして真実の生のさらに奥なる遙かなるものに目をやろうとしてられる。そして人間存在の極限まで行きついてそこで詩をお書きになっていらっしゃる、そこまでいくと生と死というのは一体のもの、一如のものです。

人が儂いつかは消えてしまう、うたかたのようなこの宇宙に浮かぶだけの存在であるなら、どう生きたらいいのかと宗先生が現実には還られ明るい生命力の強いたんぼぼに呼びかけます。

やあたんぼぼ 明けの明星の 蕾かい

たんぼぼに同じ宇宙の命を持った明星の蕾かと呼びかけます。生の奥に死があり、死の奥に生があ

る、しかも奥だと思っていたら生も死も一枚であったというところまで、先生は実感されたのではないかと思うのです。

生死一如の原点に立って現実の世を愛し活躍された先生は市川市の名誉市民になられました。その時、幸いなことに私は選考委員の一人でした。

愛しても 愛されても他人 屋の月

人間は誰もが絶対の孤独の中にいると詠まれたのです。しかし絶対孤独に苦しむのは求めているからです。ですから求めるのではなく絶対孤独に気がついたら、縄文人の持っていた愛へ回帰すれば、縄文人の愛と平和がよみがえる。人を愛し世の中を愛し、愛の歌を歌いそれを人々に伝えていく、そこに平和がある。そういう生き方が宗先生の生き方だったのです。ですから、

二十世紀戦死者一億七千万 牡丹雪

この句は私の『戦跡巡礼』にも入れさせていただいたのですけれども、普通の日本人でしたら「同胞三百万人が死にました」とか「民間人さえ死にました。原爆で二十一万人が死にました」と書きます。私もそう書いているのすけれども、宗先生は「日本人が何人死にました」と書いてないのです。戦死者一億七千万、戦争に敵も味方もない、人間としての痛み、悲しみ、人間の実相というものを見つめて書いていられる。

存在が 存在する前の存在 夜の雪

存在を突き抜けた真実の存在、本当の存在とは何か、という究極のところまで突き詰めていく先生の魂のエネルギーの強さを思います。時間は永遠である、その永遠の中の瞬間瞬間を私たちは生きているのですけれども、今と思った時には、そう思った今はすでに過去になっているので、人間は永遠に瞬間を把握することは出来ない、ということです。

ゼロというのは何も無い、しかしゼロがなかったら全ての数学は成り立たない、ゼロが原点ですけれども、0に触れることも見ることも実感することもできない。その0と言うに近い「空」の中に漂っているのが人間である。虚無ではなく、すべての数学の原点の0と同じで、どうしてもなくてはならない大ものものである「空」の中を漂っている人間ですから、この世の中で名声も要らない、地位も要らない、財も要らない、何にも要らない、要るのは何か、ご縁がある人と仲良くして、ご縁のある人と愛を分かちあって、平和に生きていく、それだけが人間の生きることである、ということをおっしゃっているのだと思います。

天の川 永遠とはただ 浮かぶもの

人は永遠を感じることができるけれども、自分のものにすることは出来ない。

波の上で動いてどこへもいかぬ月 現実には奇跡

波の上に映っている月は月の影です、影ですけれどもそれは月があるから影が映っているので、この世の中は本当はうたかたのようなものですが、しかし人は現実を生きている、その現実には奇跡だということです。現実には神秘に満ちている。素晴らしいところだ、というところに宗先生は還られるのです。

宗先生の縄文塾に私も通わせていただき、私は隅の方にいまして、鈴木比佐雄さんがいつもいろいろ質問なさって宗先生がお答えになり、ああなるほどとよく思いましたが、そうしたご縁があってこうしてみなさんとお会いすることができてありがたいです。

蜃気楼現(うつつ)よ透明(あかる)いわたしの塋(はか)

宗先生が考える「明るさ」というのは、透明で全ての真実を見通せる明るさです。死んだら土に還っていくのですけれども、生死を通してすべて明るい。人は泣いても泣きつくせない孤独を生きているのですけれど、しかし、よく考え本質を見つめれば、この世の中は透明で、現(うつつ)と思えば夢であり蜃気楼でありながら、蜃気楼かと思えば現(うつつ)である、その現を生きて人は塋に帰るのですがこの塋は場所のことです。塚は土を盛ったところ、墓は石など建てた所ですがこの塋は場所ですから、先生は土になって蜃気楼のような大宇宙に帰り、同化すると言われているのです。その同化の日まで愛に生きることの何という明るさか……、と宗先生はおっしゃったのです。時間になりました、ご静聴ありがとうございました。(拍手)

佐藤文夫(司会) 大変新鮮なお話をありがとうございました。

ここで休憩を取りたいと思います。

(休憩)

〈第二部 スピーチと鳴海英吉の詩の朗読〉

佐相憲一(司会) これから十名の方にスピーチと朗読をしていただきます。

まず最初ですけれどもはるばる神戸からきてくださった玉川侑香さんです。常連の方はご存知でしょうけれども、玉川さんは鳴海英吉さんとの大変印象深いエピソードをたくさんお持ちで、初期の研究会で述べられたエピソードなど、私も「コールサック」誌上で読んで、なんかすごい話だなあと心に深く残っています。玉川さんは詩人会議や日本詩人クラブの会員で詩誌「プラタナス」「芸芸日女路」などでも書かれています。詩集『かなしみ祭り』などを出されていて、関西では「関西弁で朗読させたらこの人はすごい」と大変定評があり、全国的にもよく知られている朗読のスペシャリストです。それでは玉川侑香さんをお願いします。

玉川侑香 こんにちは神戸からきました玉川侑香です。(拍手) 過分なご紹介をいただきました。鳴海さんとの出会いについてはいろいろ話してまいりましたが、今日は詩をひとつ読みたいと思います。実は先日私大掃除をしまして、もう古い日記帳を全部すててやろうと思ひまして、ゴミ袋にどんどんつめていったんですが、ゴミ袋に最後二冊だけ日記帳がはいりませんで、しょうがないのでその日記帳を繰り出しますと、一九八三年一九八四年の日記帳で、鳴海さんとの往復書簡をべったりと貼り付けておまして、ああえらいもん捨てそうになったなあ、と一瞬鳴海英吉が「そんなもんささと捨てんじやねえよ、馬鹿やろう」といっているような気がしまして、あわてて取り出しました。そのノートを見ながら思い出したことがありました。鳴海英吉の詩の中には「ほの白い」という言葉がよく出てくるんですね、その言葉がすごく好きで、自分の詩の一節につかっただけです。そしたらその瞬間、鳴海英吉から電話がかかってきて、私は朝の風景の中にほの白いレールが浮かびあがったというようなことを書いたんですが、それを指摘しまして「本当にほの白かったのか」というようなことを言われたんですね、私は実際に見たので「見た」といいましたら、「ああそうか、じゃあいいや」というふうに言われたんですが。そのう、鳴海英吉の「白」という言葉に対するこだわりということ、私はずっとずっと後になってから気がつきまして、「雪」ですね、シベリアの雪原の雪という白、その中での「ほの白い」という表現の中にどれほどの思いを込めて、一つの言葉にこだわったかということ、非常に恥ずかしながら鳴海さんが死んだ後にふと思いついたんですね。なんとあさはかに、気軽に私は「ほの白い」という言葉をなんのためらいもなく、自分の作品の中に使ってしまったんだらう、と非常に大きな後悔をそれからかかえるようになってしまいました。本当に一つの言葉の重みということを私は鳴海さんに「ごめんなさい」と伝える暇もなく彼は逝ってしまいましたので、私は彼のその詩を朗読することで許してもらえたらと思います。

「雪」という詩を読みます。

雪〈1〉 鳴海英吉

大八車の先棒を今日死ぬ奴が握り 後棒を今日死んだ奴が押す ぞろりとつづくのは 今までに死んだ奴 大八車に乗った奴は 律儀に強直して つっぱって凍り 下づみの奴は 真白な丸太になりながら まだなにかが不安で それでも凝視する方向を失って ほんやりしている

(今夜死んだ奴が立ち上り 収容所の入口に向かって歩いてゆくと 四隅の望楼から自動小銃が 不意にそいつを討った)

原野に凍りついたまま夜にたれ下る 沢山の兵士 起立しているものは裸木のように並び固くなった腕を張っている

まだやわらかな 今生まれはじめたばかりの 死んだ者たちの亡魂 灰白い道を わめきながら殺倒していったが ひとつひとつ凍って夜空に巻き上げられてくたかた雪になる この原野で生きているものはひとつもない 滅ぶものたちだけが前で白く生温く 俺の方に向かってくる その風物は真赤でいい それが白くみえるために なにかを失い なにかが生まれなければならない そのうつろな白いものの向うでしか 兵士は生きかえらない(雪の長い坂道を大八車をおし上げるときぎゅうぎゅう車が軋む 俺は死んだ奴がこの坂道ではじめて涙をながし泣くと 知らない者に話してやる)

瘦せた奴の頭と足をもち 丸太のようにつっぱって投棄を拒む奴の 手を折り 足を折っても 墓穴に投げ入れる 零下三二度 その腫があげばなしなのは凍って閉じないからだ 拡がった腫にはなんにもない あけ放しのまま墓穴に投げ入れるから 埋めないでくれとおまえらは言うが 黙りやがれぬげから 死んだのはおまえらの勝手 盛土してドンキュウとふみ固める 埋め終って大きく燃える焚火のまわりに集まる もう死んだ奴を忘れる

(忘れられた奴が墓穴を這い上り 灰白い雪明りの道をわめきながら駆けてゆくのだ そうだ もう一度どうして どこから奴らの死がはじまったのか)

死ぬ奴が死ぬ程原野は広くなる その空間に雪がふってくる 雪がふるなどと言うな 雪がふったとも言うな 雪がふるだろうとも言うな その雪はすぐとける シベリヤの原野では雪はひっきりなしにふるのである もう静ひつなどというものではない 狂うように乱舞するのである

(つぎは おまえさん)

(拍手)

佐相憲一(司会) ありがとうございます。これまでの研究会では大変ユーモラスなお話で盛り上げてくださったんですけれども、今日は一転して、時代が時代なだけに戦争と平和を見つめなおすという今とても大事な視点の鳴海英吉さんのびしっときまった詩を朗読していただきました。ありがとうございます。

次は大河原巖さんです。大河原さんはもう大ベテランですけれども、私から見るともう『鳴海英吉全集』に匹敵するような『大河原巖詩集』という集大成を二〇〇四年に「鮫の会」から出されています。「戦争と平和を考える詩の会」でも書かれていて、「九条の会詩人の輪」ではつどいの実行委員長も務められてきました。鳴海英吉の「戦争はもうだめだ」という想いを現代に引き継いで実践されている方です。ご自身の詩の方は内省的な観点から深いものを書かれていて、私も尊敬しているのですが、鳴海英吉の関係者としては、いままでは研究会には来られませんでした、今日来て下さってスピーチと朗読をしていただきますので、よろしくお願い致します。

大河原巖 大河原巖と申します。今日は、芳賀章内君、君で言っちゃあ悪いんですが、芳賀章内先生が(身体具合で)出席できないということで、その代理としてやってまいりました。芳賀章内さんは少年時代からの悪さをする友達でありました。芳賀さんが何でこの鳴海英吉研究会の実行委員なのかというと、鳴海英吉さんが私達がやっている同人雑誌の同人でありまして、芳賀章内さんがその同人雑誌の編集を三十年にわたってしてくださっているということです。「鮫」という雑誌なんですけれども、「鮫」に書いた詩を読ませてもらいます。鳴海さんの詩の解説みたいなことを「鮫」の編集後記に芳賀さんが書いていますので紹介させていただきます。「鮫」というのは真尾倍弘という、今度コールサックから出た『鎮魂詩四〇四人集』にも入っていますが、その真尾さんが創刊同人で、戦時の体験をもっているただ一人の同人だったのです。そこに戦時体験をもっている鳴海英吉さんが飛び込んできたのです。その二人の仲を芳賀君が編集で一生懸命もっていた。ということもありまして、鳴海さんと芳賀君は性が合ったといいますが、肝胆相照らすものがあつたらしくて、いつも酒ばかり飲んでいましたけれども、芳賀君は去年の五月に脳梗塞をやりまして、それから編集作業が出来なくなりまして、一年経つんですけれども、まだこちらにお邪魔することが出来ないということで、芳賀君のエッセイも合わせて読むことにして下さい。解説の方から読ませていただきます。

* 割愛させていただきます。(編集部より)

以上が芳賀さんの編集後記です。その雑誌の巻頭に掲げられたのが「早春・砂浜」という鳴海さんの詩です。それでは読ませてまいります。

早春・砂浜で 鳴海英吉

ここからの へんろみちは 逆まわり／白い浄衣を 早春の風になぶらせ／ここから歩き出すことになる／潮騒の正確な反復 騒がしい海の匂い／足裏に食い込む砂利道が切れると 浜／おれは 爪先を砂に取られて／膝をついた／ナホトカ集結地の砂浜／移送貨車からころげ落ちて下車する／砂浜の小さな草の群れの中に座ると／両腕をあげ 砂の中にのめり込んだ／警備兵が 起きると銃でつつく／砂浜に駆けていった男は わめいて／このままにして置いてくれと云った／白く泡立ち 日本に連なる海の／波はこちらに向かって砕けつづけ／手招きしながら 砂を寄せている／巻貝やさくら貝が 砂まじりして／その男を越えて砕けつづける／おれは波に洗われている男を見ない／なぜこんなにも海が透き通るのか／青い水平線と空を 見詰めている／警備兵が 吐き捨てるように叫ぶ／死んでいる！／打ちはじめの宿は 激しく屋根をうつ雨／頭だけが澄んで眠れそうになかったから／羊が一匹 死びとが一人 羊が十匹 死びとが十人 羊が百匹 死びとが百人……／シベリヤで死んで砂になった男たちを数える／あの日は一日で 何人死んだのだろうか？／敗戦五十年目／信仰があって 歩き出す訳ではない／遠い記憶ほど鮮明になってゆくから／それに導き出された へんろみち／ナホトカの浜で死んだ男のためでもない／挽歌を歌うには 遠く忘れられているが／シベリヤの死は 無駄死だった／ただ おれが忘れていないだけだ／黄緑色の若葉があるかなしの風に／なぶられて人肌のように汗ばんでいる／あのなかなら生きられるかも知れない／南無大師遍照金剛 なにかに会おうため／おれは ここから歩き出して／深い緑にむせびながら 四国山系の中に／消滅するために入っていくことになる(第十二回国民文化祭・かがわ九七「文化祭」現代詩入選作品・一九九七年十月)

(拍手)

佐相憲一(司会) 大河原さんありがとうございます。鳴海英吉さんは朗読がうまくて皆を感動させたとお聞きしていますけれども、大河原さんはしみじみと読んで下って、ここで鳴海さんと大河原さんが並んで、朗読されたらすごく新鮮じゃないかと想像します。また、芳賀章内さんの想いも語って下さいましてありがとうございます。

次は石村柳三さんです。お体が大変な中来てくだって、研究会を熱心に支えてくださっている方です。『夢幻空華』という大変いい詩集を最近出版されました。青森県出身で、若い頃の津軽の詩や、壮年時代一九九一年の「てんぷら人間」というペースのある優れた風刺詩なども書かれていて、コールサックきっての論客で的確な批評が好評です。では石村柳三さんよろしく願いたします。

石村柳三 石村と申します、よろしく願いたします。「詩人会議」九月号に鳴海英吉の望郷詩について書かせてもらいました。その後、信濃毎日新聞の記者の方が今年三月にシベリア抑留体験における石原吉郎について書かれたものを読みました。これを読むと、鳴海さんとはまた違ったものを教えられて、鳴海英吉と石原吉郎を対比するとここにシベリアの新しいものがとらえられるのではないかと思います。石原吉郎はシベリアについて詩では直接あまり語ってなくて、それはなかなか書けないですよ残酷で、失語と断念といいますか、戦場で自分が何をやってきたかは、ほとんど語っていません。そして全て引き受けることで自らにピストルを突きつけて死んでいった。で、鳴海さんはその反対に、自分のそういう経験は残さないといけないということで、この二つの生き方、鳴海さんは生涯シベリアを書き続け、石原さんは断念することで死んでいった、その二つの気持ち、分かる気がします。戦争というものはひどいものだと感じました。シベリアでは兵隊が狂いだして森から帰ってこないっていうんですよ、日本の制度がソビエトのラーゲリにまで持ち込まれたんですね、戦争が終わっても。将校がいばりくさって自分の兵士が自分の言うことを聞かないからといって、外に放り

出すんですよ、外は零下三十何度ですよ、そういうのを日本人同士でやっていたというんだから、もうあきれて、戦争を知らない私などは、一体軍隊ってのは何だったのかな、というそういう感じがします。それがシベリアというものです。鳴海さんのシベリアの風土の特殊という内容の詩を読みます。

星 鳴海英吉

シベリヤでは なにもないものが凍る／すきとおる空が凍る／星のくだけたようなものになり／きらきら ぶってくるのである／木々のからみ合いを切りひらく／沢山の鳥たちが 群れてとび立ち／一しゅん どよめいてのあと／真昼の青空から 星がくだけてふるのである／木の下敷きになって死んだ 奴を／雪の上を ずるずると引いてゆく／雪の上にはみ出した内臓を残してゆく／シベリヤ鴉の餌／神も仏もあるもんか と吐き捨てる／だがおれに そのほかに なにがある／生きていると思うな／生かしていただいているのだ／ふり返るとなにもなかった／黙りくねり 長い列／きらきら ひかりふる 星／ずるりと引かれている死／うすく眼をあけている／ぼんやりとした 厳寒の前ぶれの／うずくまった森 真昼／星が きらきらその空間にふっている

(拍手)

佐相憲一(司会) 石村さんありがとうございました。石原吉郎との比較でそれぞれの書き方があったという大事な視点は、今後も研究されて発表していただきたいと思います。

次は細野幸子さんをお願いいたします。細野幸子さんはこれまでこの研究会に熱心に参加されてきた方ですけれども、大変謙虚な方で、自分などはとてもこういう場で読めないのではないかと鈴木比佐雄さんにおっしゃっていたみたいですが、細野さんのように熱心にずっと来ていただいた方こそ、マイクを持っていただきたいなと思います。是非リラックスして好きなようにしゃべって下さい。細野さんは日本現代詩人会所属で「北国帯」という詩誌で書かれています、よろしく願いいたします。

細野幸子 私は鳴海英吉さんとはあるパーティでたった一度しかお会いしたことがありません。お酒を飲んでいらして、私がお挨拶したら握手を求められたのですけれども、私は恥ずかしかったので手をださなかったら、なんか「こらっ」て怒られたんですね。私が今日読みたいなって思うのは「子供」という大変可愛い詩なんですけれど、こどもにかえたような内容です。

子供(マーリンキ) 鳴海英吉

ちいちゃな 女の子が来て／歌えと 言うのである／ロシア語は 分からないが／ほっぺを ふくらませる？／ちいちゃな 男の子を呼ぶ／歌えと 言うのである／男の子は すばあすばあと／煙草をふかして 歌え！／ちいちゃなスカートを ふくらませて／れんげの草の上に ちよこなんと座り／歌えと 言うのである／なんだか分からない なんだか分かった／童謡を 歌っていると 涙が出てきた／なんで 泣くんだと 聞かれるけれど／おれにも よく分からないのである／(からす なぜ啼くの……………)／じいっと おれの顔を 見詰めていた／だんだん ベソ顔になってきて／ママ！ 帰ってくるもん／帰ってくるもん……………／勲章 れんげの 髪かざりを／破れた軍服に 挿してくれた／ちいちゃなスカートを摘んで／おれに 片膝を曲げ挨拶した／挨拶されて どうしたら良いのだろうか／分からないから するめいか みたいな／拳手の 敬礼をした／さようなら(ダスピダニヤ)またあした！

(拍手)

佐相憲一(司会) ありがとうございました。こどもと鳴海英吉という新鮮なものを紹介していただきました。私などは鳴海英吉さんというと、直接お会いしていないので何か伝説ばかり聞かされて、豪快

なイメージが強いんですけども、今細野さんのおかげで、鳴海さんはこどもとの交流、そういうものも持っておられたんだなあと、新鮮でした。今日は来ていただきお話ししていただいて本当によかったです。ありがとうございます。

次は一九六〇年生まれの尾内達也さんをお願いしたいと思います。尾内さんはドイツ語で俳句も書かれまして、今日本の詩の世界で一番注目されるべき存在ではないかと私は思います。ヴァレリー・アフアナシェフさんという方の詩集を翻訳されて、鳴海英吉研究会ではパウル・ツェランと鳴海英吉を並べて朗読するという斬新なことも過去にされています。「コールサック」でも書かれています尾内達也さんよろしく願いいたします。

尾内達也 尾内です、よろしく願いいたします。僕は前回から鳴海英吉さんと他の詩人・俳人の作品を並べて朗読するという試みを始めまして、今日もそれにそったラインで朗読させていただきます。先ほどから何人もの方から優れた研究報告がされていますけれども、僕もはじめは鳴海英吉さんという、どうしてもシベリア抑留のイメージが非常に強くて、『ナホトカ集結地にて』の詩がすごくインパクトが強いのですが、だんだん鳴海英吉さんを知るにつれて、鳴海さんの中にある日常というものを意識するようになってきました。よくよく考えて見ますと、鳴海英吉さんという人は戦争の中にある日常というものを書かれた人であり、日常の中にある戦争に引掛かった人であると言えるような気がしてくるんですね。先ほどの細野さんの朗読なんかも、まさに戦争の中にある日常だなあと感じながら聞かせていただきました。鳴海英吉さんの日常がどんなものだったのか分かるような詩を二つ選んで、それにそれぞれ合計三つの詩を重ね合わせるような形で朗読させていただきたいと思います。はじめは、鳴海英吉さんの「四季のソネット」というのがあるんですけども、四季の感覚というのは日本人にとって非常に現象的というか根源的なもので、鳴海さんもやっぱり四季の感覚を持たれていた方で、春夏秋冬の区分のあるソネットを書かれていたんですね、しかしながら、例えば夏を読みながらどこかに死の影がある、戦争の影が拭いきれない、そういうふうなソネットになっているんですね。それに対して蕪村という俳人の、僕が選択した十句を重ね合わせて読んでみたいと思っております。蕪村は皆さんご存知のように芭蕉と対照的な人で、日常の中に永遠を見た人だと言えるんじゃないかと思うんですけども、芭蕉は旅に真理を追求した人であり、蕪村は定住者だといえるんじゃないかと思います。ささやかな日常の中に深いものを見た、けっして過激な言葉や新しい言葉は使わないのですが、それでも俳句としてできあがったものを見ると、すごく深くて洗練された怖さみたいなものを感じます。次に鳴海英吉さんの「果樹を植える」という詩があるんですね、すごくなげない詩なんですけれども、とてもいい詩じゃないかと思っています。まさに日常の生命の営みを鳴海英吉さんが非常に価値があるものだと思っていたことを証明するようなそういう詩だと思うんですね。ここには否定的な契機というものはあまり感じられないんですね。その意味ではすごく俳句に似ているなあと思うんです。これに対して『醒睡笑』という戦国時代、安土桃山時代に書かれた笑い話があるんですが、けて難しい古文ではなく、落語の元になった古文だといわれているんですね。お坊さんが集めたものだそうです。戦国安土桃山時代というのは戦乱が続いた時代なんですね、戦乱が続いた時代の中にも笑いというのが確かにあった。他愛ない笑いではあるんですけども、時代背景を考えるとその笑いの意味というのもちよっと考えこまざるを得ないようなところがあって、鳴海英吉さんにある語りとか笑いとかいう要素と、『醒睡笑』というのが、どういうふうに響きあうのか。三番目は先ほどの「四季のソネット」の中の「冬」と「春」を読ませていただいて、これに対して僕が今朝書いた詩なんですけど、鳴海英吉さんへの挨拶として書いた詩を読みます。今日上手さんがおっしゃったように、鳴海さんが忘れない詩を書いている、忘れないように詩を書いている、それに対して僕は忘れる詩を書いているんですね、非常に対照的で、これが挨拶になっているかどうかわかりませんが、忘れない詩の中にある忘却みたいなものを鳴海さんはかすっているんじゃないかと思います。忘れるといっても、忘れないものは当然あるわけで、そこに僕の詩がかすっていれば裏側から響き合うんじゃないかとそんなことを感じております。それでは朗読させていただきます。

夏・蝉 鳴海英吉

三年ぐらい 土のなか／この夏 わずかに 地上に生きる／やりたいことが いっぱいある／この夏 うるさいなどと言うな／言いたいことは 言わせてもらう／言い終わったら さあ 食ってくれ／腹を上に しっくり返る／／題目も念仏もない／どうぞ ご遠慮なく／ならば 蟻がにじり寄った／／土のなかで 幼い蝉／コリコリ食う音／なるほど そう言うことか／うずくまって聞いた

秋・柿 鳴海英吉

柿を盗みにいって 柿の木に登ったら／屋敷の部屋という部屋に 電灯がついた／見付けられたと思った／／電灯が 分けられるように／裏山に登ったり 畔道を踊りながら廻る／長屋門に 高張りちようちんが出て／ぼんやり薄く明るくなった／／今年は からすが 戦地に行ったから／柿がよく実をつけた／小ぢやな おばあさんが言った／／おかげさま 死にました／旦那さんの 嬉しそうな挨拶／木から下りられない ぞくっと秋／柿をかじったら 渋柿だった

蕪村十句

秋風の吹きのかしてや鶏頭花(けいとうか)／朝がほや一輪深き淵の色／染あえぬ尾のゆかしさよ赤蜻蛉／蜻蛉や村なつかしき壁の色／稲づまや浪もてゆへる秋津しま／四五人に月落かゝるおどり哉／秋風をわすれて居たる寝裳哉／秋風におくれて吹くや秋の風／心太さかしまに銀河三千尺／端居して妻子を避(さく)る暑かな

果樹を植える 鳴海英吉

今日 かりん・すもも・うめ を 植えた／湿地帯で 砂まじりのゴロ土／水捌けだってわるいから／枯れるか 花なんか咲かない／果物が欲しいなら スーパーで買える／山づみにして 売っています／この果物が食べられるのは／ずーと遠い先のこと／おれ たぶん 生きてはいない／そう言うことって つまらない／／つまらないことって／多分 いいことじゃあないのかな／多分と また言ったりする／スコップで 雑草の根を切りはらう／油カス他を 大きめな穴底に埋め／ほそいメートルぐらいの 果樹を植える／この小さな庭を おれの生涯に見立てる／／かりんの花は薄黄(うすき) すももは紅(くれなゐ) うめは白／そんな色取りで 咲きたいように咲く／小枝を伸ばして みどり色に 芽ぶく／家の軒先まで枝が伸びたら／花芽は どころへんで 切ろう／春 果樹を植える／温かな たかぶりが あるのはいい／左足の関節が すこし痛いけれど／スコップを 土に突きさす／生きものを 植える／ぎらっと 大粒の汗を拭い／今年のはじめての 生水を飲んだ

『醒睡笑(せいすいしょう)』から

十三 猿の長生自慢

山林に、猿どもたはぶれ居たり。十月末つかたにやありけん。柿(かき)の熟したる四つ五つ残りあるを、われ食はん、たれ食はんと、くらひては多し、柿は少なし。「所詮、年老次第にくらはん」といふ。老猿出でて、「われは過去迦(かせふぶつ)葉仏(かせふぶつ)の時より、この山に住む」と。またひとつが出ていふ、「そちは一向近い事や。そのころわれは孫にはなれ、歎きに沈みてありつるは」とある。

教月坊(けうぐわつぼう)にむかひ、「そなたは奇妙なる作者なれども、あまり狂言にて証歌の名誉なし。いかが」といふ。言下(ごんか)に、

教月に毛がむくむくとはえよかしさる歌よみと人はいはれ ん

いはざると見ざる聞かざる世にありて思はざるをばいまだ 見ぬ哉(かな)

「四季のソネット」より

冬・蠅 鳴海英吉

蠅たたきを 構えて／殺す 恐くないかと 聞いたら／人間と同じ 死ぬまでのいのち／蠅が にやつと笑った／／あんたごときものに／叩かれなくても この霜をおく冬／精いっぱい 生きて死んでゆくさ／／あんたは なんなのさ／冬の日溜まり ぬくぬくぼんやり／ふった女のことを かんがえている／／鯖の味噌煮 青い一皿の菜／ろくなものを 食べていない／蠅に言われて／すまんと 言った

春・梅 鳴海英吉

古い来信を整理して 燃やした／霜で土は濡れているが 火の廻りは早い／おれの生涯 ぜんぶ燃やした／／何十年前の 分厚い手紙／燃えきらないで煙る／／なが 書いてあったのだから／なぜ 今まで持っていたのだから／／燃えのこりに 火がつく／戦争の日々 おれは黙して語らぬ／黒枠の葉書も 火がつく／手紙の燃える匂い 露のとう／のこり火と灰に 手を温める／手紙の死灰を 野にいっぱい撒こう／梅と女の匂いがひろがる

釣り —鳴海英吉に— 尾内達也

朝顔の淵で釣りをしていたら／みんな忘れてしまったよ／釣りのことも／戦のことも／今のことも／星の名も／妻のことも／雲のことも／魚のことも／言葉のことも／あることも／ないことも／気持ちよく／軽くなって／淵をのぞいたら／銀河が激しく動いていたよ／これが《死》なんだね／／おいら誰だったんだらう／誰でもないさ／おいら誰だったんだらう／誰でもあるさ／なあ 鳴海さん／／たまには声を聴かせてくれよ／／天外や夢の中にも秋は来て

(拍手)

佐相憲一(司会) ありがとうございます。もう一回文字になったものをゆっくり読むと、さらにすごい感じがするでしょうけれども、鳴海さんへの呼びかけ、届いたでしょうか。梅の香と女の香というところも、もしかしたら鳴海さんの特徴のひとつを表しているんじゃないかと思います。

次は先ほど開会の言葉をいただきました朝倉宏哉さんをお願いしたいと思います。千葉にお住まいです、『朝倉宏哉詩選集一四〇篇』という本が今大変好評です。日本現代詩人会の理事をされていて、詩人のために会の会計という一番しんどい役割を身を粉にしてされていて、この担当のために今はご旅行も出来ないとお聞きしています。大変地道に歩まれてきた方です、朝倉さんよろしく願いたします。

朝倉宏哉 朝倉でございます。地道に歩いてきました。(笑)一九七〇年に千葉現代詩人会というのが城宿さんを会長に出来て、その創立メンバーとして私も鳴海さんも加わりました。その後ずっとなにかにつけて会合で一緒になったし、当時は文学散歩なんかもよくいきて、家族連れで一緒にいったとかありました。まだ整理しておりませんが、鳴海さんからいただいたはがきがたくさんあります。今年は日本が朝鮮を併合して百年目、大逆事件も百年、そして戦後六十五年という近現代史の節目の年であります。戦後六十五年経って文書の公開などがあって明らかになってきたこと、それから今まで沈黙を守ってきた兵士が八十歳代九十歳代になってぼつぼつと戦争の実態を語り始めたというような現象が最近ございます。今日はそういう情報を多少取り入れて、鳴海英吉と戦陣訓ということにポイントをおいて話をしたいと思います。戦陣訓と軍人勲諭は軍人の憲法というべきもので兵士が骨の髄まで叩き込まれるものです。これは日本兵の精神的バックボーンとして、これによって日本軍が維持されたといっても過言ではない。特に一九四一年、昭和十六年東条英機によって出された戦陣訓というのは、最前線にいる兵士の行動規範をなすものでした。なかでも、「生きて虜囚の辱めを受けず、死して罪禍の汚名を残すことなかれ」という項目は、どんな絶望的な状況でも降伏してはいけない、玉砕か全滅を奨励したのです。捕虜になりますと、捕虜の口から日本軍の機密が漏れ

たり、士気を低下させるということから、死をかけても守らなければならない軍法です。捕虜になったことを知られますと、家族が非国民と呼ばれたり、村八分になったりすることがあった。八月十三日にNHKテレビで「玉砕」という番組がありました。これはアッツ島の守備隊、二六三八名が全員玉砕した実態が今まで謎だった部分があるわけですけれども、これを検証したドキュメンタリーで、大変優れた番組であったと思います。簡単に申し上げますと日本軍は圧倒的なアメリカの大軍を前に、援軍も食料も尽きて、大本営に要請しても見捨てられたような状態で、全員総攻撃して玉砕した、というふうに本土では非常に美化して報じられたわけなんですけれども、実はこの中で瀕死の重傷を負って二七名の方が捕虜になって、戦後復員してきているわけです。昭和十八年の玉砕でございますので六十七年たっているわけです。そのうちの三人の生存者を番組が探し出して、インタビューしているわけです。三人とも、現在八十九歳です。岩手県の農業をやっている佐々木一郎さんという方が出てきて、重い口を開いてこう言っているわけです。「戦陣訓通りに死ねればいいさ、どうして俺は生きてきたんだろうというも思う」。それから川崎市の方は「生きて虜囚の恥をかいているんです、恥をかいているんです、みんなに恥をかいているんです」と悲痛な声で言っているわけですね。戦陣訓が兵士の心を呪縛していた典型的な例だと思われましても、収容所にいた日本兵はどのような心理状態になっていたかという例を簡単に言うと、オーストラリアのカウラ収容所でおこった脱走事件というのがあります。一九四四年の八月ですけれども、ドイツ軍、イタリア軍の捕虜が大勢収容されておりまして、日本兵捕虜は一一〇四人いたわけです。日本兵だけが一九四四年、終戦の前年八月五日の夜に集団脱走するわけです。オーストラリアの警備兵によって死者二三名、負傷者一〇八人を出して収束するわけなんですけれども、脱走の理由は、「戦陣訓」から日本軍人固有の意識や外交・国際関係の知識不足による誤解があった。また日本捕虜は本国に照会されると家族が非国民扱いされるので、ほとんどが偽名を使い家族に手紙を書かなかつた、と報告されています。鳴海英吉さんは捕虜であったわけです、昭和十九年一月に入隊して一年半は中国を転戦して、二十年の終戦時には北朝鮮の咸興に移動したところで終戦を迎えるわけですが、そこでソ連軍に武装解除されてシベリアに抑留となります。抑留生活は極寒の中千人以上の収容者の中、病気餓死などで一冬の間には五百人が死んだという、そういう冬を生き延びたのです。翌二十一年は三つの収容所を転々としながら、農業、ペンキぬり、道路工事、レンガ作り、それから雑役などに従事していました。二十二年三月ナホトカに到着して、二百名の抑留者の名簿を隠しもって、八月十五日、舞鶴に帰国するんです。その三年半の軍隊生活の後半二年半の体験のすさまじさは膨大な作品によってわかるわけですけれども、それでは鳴海さんにとって先に見たように「戦陣訓」はどのように作用していたのでしょうか。私は興味をもったんですね。それで『鳴海英吉全集』を検証しました。そうしましたら、「戦陣訓」が出てくる作品が一篇だけあったんですね。『サカロフスカ国立農場にて』という詩集の中の「晩秋」という四行八連の詩であります。この詩は昭和二十一年秋、道路工事や農業といったことをやらされていた頃、捕虜の中で寡黙でなじめない一人の男がいるわけですね、彼はこざっぱりとした軍服をきて、病院がえりということなんですけれども、どうやらこの人は、帰国しないでロシア女と暮らすことになったらしくてですね、収容所の門を出て行くという情景を描いているんですね、その「晩秋」という詩を読ませていただきます。ロシアに残る男が「捨てられたんだ」というところに、鳴海さんが「戦陣訓」というものの本質を捉えていたんじゃないかなと私は思うのです。「捨てられたんだ」というこの戦陣訓の本質的な意味を看破していますし、それから鳴海さんは入隊前に演劇の役者やシナリオや詩を書いたりして文化活動をしていました。何度か検挙されているんですね。入隊する前の年に治安維持法で思想犯ということで検挙されまして、拷問されて軍隊で鍛えなおしてこいと言われて釈放されます。そしてその翌年入隊するわけですけれども、このような経緯からして戦場では最前線のもっとも死ぬ確率の高いところで戦わされました。まあ、そこを生き延びてきているわけですが、したがって鳴海さんは天皇制や軍隊に対する客観的な醒めた目をもった兵隊ではなかったかと思うのです。「戦陣訓」の不条理、偽善から距離をおいた醒めた視線で極限における人間の真の姿を赤裸々に表現できたのではないかと思います。

鼻が 嗅ぎ分けるのか／この男は 何か違うな／病院帰りと 言うのだが／病人にしては いい顔色
／着ている軍服も 綺麗すぎる／所属部隊も 聞いた事がない／寡黙な男で 何も喋らない／な
じめない なじまない 男／／燕麦の 取り入れが 終わった／秋だな 帰国(ダモイ)だなあ／日本
は秋 帰るには いい季節／百姓は 一番忙しい時期なんだ／霧が 草原を 覆っている／灰白
色の ぼんやりとした／有刺鉄線の 向こう側に／黒いネックチーフの女／泣き声を聞いた 有刺
鉄線を／揺すり 男の子が泣いている／小さな手から血が流れている／ロシア女は黙って立って
いた／／生キテ 虜囚ノ辱メヲ受ケズ／兵隊の心得 戦陣訓に有った／元気で 祖国に帰って下さい
／拳手の礼で 門を出て行った／／おれ達は 戦時ではないから／捕虜ではない 俘虜なんだよ／
言い訳がましいが そうだな／隣の奴に 確かめてみた／／東京者だそうだ 氏名は言わん／あの
兵隊も 捨てられたんだ！／恠しいなっ 寂しいじゃあ……／生キテ虜囚ノ辱メ……秋……

(拍手)

佐相憲一(司会) ありがとうございます。朝倉さんはNHKに勤めておられたこともあって、歴史の証言の詳しい話もお聞かせいただきました。

次は山佐木進さんです。最近『そして千年樹になれ』という新鮮な詩集を出されました。短い言葉で飄々と語る中に本質を書く新しい詩を追求されています。千葉にお住まいで日本現代詩人会に所属され、「光芒」という詩誌で鳴海英吉さんと一緒だったそうで、『鳴海英吉全集』が刊行されたときにはたくさん買って図書館に寄贈されました。山佐木進さん宜しくお願いたします。

山佐木進 山佐木です、よろしくお願いたします。最初に鳴海さんと出会ったのは千葉県現代詩人会の創設のちょっと後です。そのあと「光芒」という同人誌がありまして、斎藤正敏さんという方がやっていて勉強会をやっていました。私はそのころ流通業の第一線にいました。日曜祭日は休まない、休みを取らないことにしていました。ですから、合評会で会うことはほとんどありませんでした。だれかの出版記念会であって話をするくらいでした。鳴海英吉さんの詩の本当のよさがわかったのは全詩集をみてからです。今日読ませていただきますのは「友」という詩なんですけれども、キリスト教の牧師さんが軍隊に取られて、牧師の仕事は「殺すな、汝の敵を愛せよ」、牧師さん自身も軍隊の中で非常に苦しんだんじゃないかと、そのことを含めてこの詩集を読みまして、そういうことを私に考えさせてくれたということです。では読ませていただきます。

友 鳴海英吉

みんなで あいつは死ねばいいと思っていた／おれも死ねばいいと／いつ死ぬのかと楽しみにしている／寝台から骨に皮をつけた細い腕をたらし／夕食の黒パンの切り方は 左の方が大きい／腕をふらりふらりゆすって毎日抗議する／不当な行為は 神が許しません／うるせい生きぐされ 神も仏もあるものか／生きられる者が 生きてりゃあいい／骨のまあるい握りこぶしをふり／トリ目でもパンの大小は判る／見えないものが見えるのは 神の摂理です／イエスキリストを信じなさい／／死んだとき すっぱだかにして／雪の上に放り出しておいた／所持品のポロは 御世話料として分配する／家族らしい一族の写真も破って捨てた／おれは飯ごうを手に入れ／ポコポコと調子よく叩いてみた／死んだあいつが うす眼をあげる／食いたそうな眼をしているのが／灰白い雪の照り返して きらりと光った／おれはこいつは死ねばいいと思っていた／迷ったかあ！／防寒靴で雪をけとばし／あけ放して光る眼にかけ／なむあみだぶつ ただの念仏を唱えてやった／／墓地にあいつの死体を運ぶ／ぎゅーうぎゅーう 大八車が軋んで泣く／凍って固くなったあいつをつかんで／墓のなかに投げ入れる／まず墓穴のまわりの雪がぐずれ落ちる／またも雪が……／ふっと讚美歌で奴知ってるか と聞いてみた／みんなそんなものは知らんと不機嫌だった／不正な行為は神が許しません／イエスキリストを信じなさい／腕をゆさゆさ揺って 雪をふらし始める

(拍手)

佐相憲一(司会) ありがとうございます。

次は山岡和範さんです。一九三一年広島のお生まれですから、先ほどの大河原さんと同じ年ですかね、原爆詩人の峠三吉ともに詩を書いていた方々のうちで最年少だったという生き証人のような方です。最近『山岡和範詩選集一四〇篇』というのを出版されて今話題になっています。詩人会議の常任運営委員をされていたときに、鳴海さんと親交があったと思われます。山岡さん、よろしく願います。

山岡和範 山岡でございます。ずいぶん前の話になりますが、「小選挙区制に反対する詩人の会」というのがありまして、水道橋の会館で参加したことがあります。休み時間だったか会の終わったあとだったか、そこの喫茶店で岡山の坪井さんと松田さんと鳴海さんが話していたところに私も加わって話をきいていました。鳴海さんは話が好いで、酒も好きなようでその時の笑顔にとっても親しみを感じました。その後鳴海さんが壺井繁治賞を受けたので、鳴海さんは酒が好きだけでなく、すごい詩人なんだと改めて思ったわけです。この度コールサックの鈴木さんがここに誘ってくれて、鳴海さんの詩を読むことになり、私は詩を読む会合であまり読んだことがないのですが、読ませていただきます。

きょうちくとう・八月 鳴海英吉

空襲で焼け出されて 横浜から千葉／その家に シベリヤから復員してきた／庭に きょうちくとうが
咲いていた／／ただいまって 言ったら／あと 何も言うことがない／仕方がないから おれの本はと
聞くと／遺品と書かれた ミカン箱が置かれる／／茶色の 改造社文庫／レーニン主義の基礎 昭
和七年発行／生き抜いた 涙は出さないが泣いた／／ちーん 鐘の音がするから／ふりむくと 押し
入れの中に 仏壇／鮮やかな桃色 きょうちくとう一輪と／おれの 位牌があった

(拍手)

佐相憲一(司会) ありがとうございます。

次は岡山晴彦さんです。「晴彦」と書いて「はるよし」と読まれます。今までもこの研究会に出演された方で「衣」という詩誌や「詩と創造」などで書かれている方で、日本の伝統的な庶民の語り文化が鳴海英吉には強く感じられて共感されたとい前の研究会でスピーチされています。今日も自由に語っていただきたいと思います。岡山さんよろしく願います。

岡山晴彦 岡山でございます。過去三回出させてもらいましたが、特に最近感じておりますのは、もし戦争がなかったら、兵士に鳴海さんがならなかったら、いったい鳴海さんは詩を書かれたらどうか、もし書かれたとしたらどうい詩を書かれたらどうか、ということです。鳴海さんの詩の本質というのは一体何処にあるのだろうか、こんなことを考える時もあります。私が最も惹かれる詩は、シベリア詩群は別格としまして、『風呂場で浪曲を』の「へんろ」それから「ひじり」「和讃」という内容の詩群でございます。『念仏』という詩集も同様であります。今一般に書かれている遍路というのは道を遍くという漢字であります。これはどうも江戸時代からのようで、それ以前は「辺境」の地の「辺」という字をあてていたようですね。四国霊場巡礼などをいいますけれども、もともとは一群の宗教者たちが都から離れた辺境の地、つまり辺地を修行の場とした。つまり辺地を巡る道というのが本源のようです。辺地は辺道ともいいますが、詩人が転戦した中国の各地、過酷な労働に服したシベリア、戦前戦後の厳しい時代の生き方というの、まさに辺道を生きる命の遍路ではなかったかと思ひます。これをうたい語らずにはいられないという詩人の宿命ではないでしょうか。『風呂場で浪曲を』などというユニークな題をこれもやはり日本人の、借り物ではない思想、詩の想念を告げられたのだと信じております。なかでも「木食ひじり」というのがありますが、これは朗誦するうちに憑依してしまうような大変な傑作だと私は思っておりますが、これは前々回に取り上げましたので、今日は「念仏ひじり」を読ませていただきます。

生まれ生まれ 生まれて／生の始まりに暗く／死に死に 死んで／死の終わり暗し／弘法大師／
 とおい むかしの うた だ／死んでゆく秋のような うた／するどく木枯しに ふきとんでしまった／う
 た ひたむきに散り いまは落葉／とうめいなものを分けてみたときの／うつろなうた／まぶたが う
 たう うただ／そんなうた／指先でくるむ そと まゆのように／掌のなかで温い 悲しみだけだ
 ／どうして 白く長いまゝに／繰り出される 糸車のように／沈む 宿業のようなものが／くるつくるつ
 くるつと くりかえし／誰が この うた を傷付ける／こがね色に枯れる あしかび は前に／うた は
 うしろから 減んでくる／見えない扇のように／／ひじりが 念仏するとき／ときいろの海鳴りを聞いた
 た／半月の水平線が ゆっくりと迎えにくる／荒れ果て おれの瞳の中で 見えた所から／手招いて
 いる 白いみ仏の顔が／あるはずのないものの位置にあつて／長く鳴っていた秋雷が走り去ったところ
 らだ／うたは 影のように ふってくる／いまはもう ログもつても忘れはしない／うた 近づくと もう
 去ってしまう／とおくで くりかえして うたう／前の 知らない花々は枯れる／うしろに とんだ 蝶
 は落ちるだろう／生きているものは ここにはなんにもない／ないはずのものが／いま鮮烈な念仏と
 なって流れる／もう消えたもののなかにとどまるものはない／蓮華三昧院(*) も ないのかも知れな
 い／凍てついた雪の下をぐり水／貞応三年六月ここに始まったものではない／あつたものとあるは
 ずのものも流れる／流れ流れ去る それは うただ／割竹を引きさいて去った ひかりと風は／ヒュ
 ウヒュウ もがり笛を鳴らしてふく／水と風がこれほど あふれようとする／その叫び声があふれよう
 としている／その呼ぶものの彼方 ひじりは流れる／／この うた では人は黙して立ち去るだろう／
 あまりにも低く悲しい つぶやきだから／それでも とざらせてはならぬ／まだ 誰も聞きとれなかつ
 た／あざやかな 牡丹の花の修羅／いつまでも そこで泣いている女がいる／こきざみに ふるえる
 肩に／手を置くように やさしさを伝えておくれ／その女は こまやかな雨で／大島つむぎと黒髪が
 濡れている

* 蓮華三昧院は高野山東別所にある“平治の乱”で殺された信西上人の子 明遍上人の創建である 明遍上人は 念仏ひじり の始祖と云われる 貞応三年六月寂

(拍手)

佐相憲一(司会) ありがとうございます。切々と読んでいただいて、感動しました。鳴海英吉さんは朗読の名人だったそうですが、鳴海さんの詩が好きな人も朗読がうまくなるのでしょうか。今日はみなさんそれぞれ朗読が大変お上手で思わず聞き入ります。

さて第二部の最後は水崎野里子さんです。この研究会にずっと参加されていて、鳴海英吉さんの詩を英訳するという試みを今されています。最近出された『ゴヤの絵の前で』という詩集が話題になっていますが、現代のアジアで人々が日本と日本人をどう見ているのかということ、直接現地では対話されるという非常に重要な詩業をされている方です。最近、デイヴィッド・クリーガーさんというアメリカ詩人の原爆の詩集を日本語訳された詩集『神の涙』も出されました。水崎さんよろしく願いたします。

水崎野里子 私にとって市川というのは文学が文字で書かれたものではなくて、生活圈の中で出てきた親しいものに繋がっています。

鮭 鳴海英吉

鮭が帰ってきた／鮭は生まれたところに 産卵のために／うすい川のせせらぎを尾で叩きながら／
 青黒い背ヒレを見せ／鮭は生まれたところに帰ってくる／誰が鮭に生まれたところを信じさせたのか
 ／／鮭の上ってくる川を下ってゆけば／日本に帰れるだろうか／しぶきに叩かれつづける岩のかけ
 で／産卵を終えた鮭が 沢山死んでいた／生まれた水のなかで／うす明るいひかりを見たような眼

で死んだ／おれは突発的に／鮭のみちを下ってゆこうと思った／／収容所(ラーゲル)に連れもどされた おれは／産卵のために上ってきた鮭を食いながら／川を下って行ったと言ったきりだ／生まれたところに帰る鮭は／うろこがはげ落ちて傷だらけだった／おれは取調官に向って不機嫌に言った
／／鮭は生まれたところに帰ってきた

「女友達」(長編詩)より 鳴海英吉

女ってのは あんた／運・不運は 亭主したい／変なの 掴むと 一生の不覚／／この内裏さまの
旦那の方は／あの天空襲のとき 焼かれましてな／ぼあつ 変な音がして おしまい／らちやくちゃ
ありませんでしたわ／／あたしなんぞは 今度の戦争で／亭主 二度も変えました／あたしの あそ
このサイズ 狂いばなし／男ら／／ばあつ ですわ／／このお料理 築地の魚清のもんです／一は
し つけて下さいな／ぐい呑み ぼうふら わかすつもり

(拍手)

佐相憲一(司会) ありがとうございます。

お名前だけご紹介させていただきます。過去の研究会で第二回の時に記念講演をして下さった柴田三吉さんがお見えになっていますので、ご紹介いたします。(拍手)

それからもう一方、第一回で司会をしていただいた山中真知子さんもお見えになっていましたが、ご用事で途中で帰られました。

ではこれで第二部を終了いたします。みなさん、ありがとうございます。(拍手)

引続きまして第三部といたしまして、これまで鳴海英吉研究会の中心になってずっと支えてきましたコールサックの鈴木比佐雄さんのご挨拶です。鈴木さん、よろしく。

〈第三部 研究会を今後どうするか〉

鈴木比佐雄 コールサック社の鈴木比佐雄です。本日は様々な観点から鳴海さんを論じて頂きとてもありがたく思っております。「鳴海英吉研究会」は、二〇〇二年八月に『鳴海英吉全詩集』が刊行された後、翌年の二〇〇三年春に出版記念会が開催されて、鳴海さんの詩的精神を引き継いでいこうと多くの皆様のご支援で発足されました。今回で五回目ですが、出版記念会を合わせますと六回目となり、八年近くも続いております。当初から市川駅近くの厚生年金会館で開いておりましたが、今回からはこの市川市文学プラザの根岸秀之さんたちのご尽力で会が開かれることになりました。この場所は昨年私が宗左近さんについて講演をした場所でもあります。その時の講演内容で宗左近さんの活躍される前に、戦後まもなく詩誌「純粹詩」を創刊した福田律郎やその片腕だった村松武司、そして福田律郎を敬愛し詩運動と一緒にしていた鳴海英吉などがいたことを触れました。すると根岸さんたちスタッフの方が市川に小説家、戯曲家、シナリオライター、学者たちの歴史以外に戦後の詩人たちの歴史があるのかと驚かれました。そのことが機縁で今回の「鳴海英吉研究会」の会場を後援という形で提供して下さいになりました。この市川市文学プラザは、二〇〇三年の出版記念会で鳴海さんについて講演して下さい宗左近さんも設立・運営にも助言されていたとのこと。その意味でもこれからは「鳴海英吉研究会」を鳴海英吉だけでなく、市川で活躍された詩人たちを研究し、紹介する場にしていきたいと考えています。本日の三部のテーマと言うか課題は、今後の具体的にどのような詩人たちを「鳴海英吉研究会」をどう発展させていこうかを相談したいと考えています。具体的に言うと先ほど中津攸子さんが講演した宗左近、私が一九八七年に鳴海さんに初めて会った時に鳴海さんは自分のことよりも語っていた福田律郎、その片腕の村松武司、また晩年に市川や船橋に暮らしていた宮沢賢治の手帳研究家であり、広島原爆直後の惨状を記した『絶後の記録』の著者でもある小倉豊文、また小倉豊文さんを敬愛して交流し、鳴海さんとも「列島」で活躍され、『原爆詩一八一人集』の発案者であった浜田知章の五名の詩人たちを研究していきたいと願っています。このような人選でいいかどうか今日お集まりの皆様にご意見をお伺いしたいと願っております。もし宜しけれ

ばこのような詩人の何名かを鳴海英吉さん以外に研究していきたいと思います。二年後の「第六回 鳴海英吉研究会」には、鳴海英吉さん以外に五人の詩人の中から二～三人を選んでそれらの詩人をじっくり論じてもらいたいと考えております。

それから一つ鳴海さんと浜田さんのエピソードをご紹介します。一九九六年に小倉豊文さんが亡くなった時に、柏の賢治研究者であった小野創さんが「賢治談話室」という集まりで偲ぶ会を開き、小倉さんの長女である三浦和子さんに父の豊文さんの思い出を語ってもらいました。その際に私と浜田知章さんもミニ講演を頼まれました。その時は鳴海さんも駆けつけてくれました。会が終わり三人で柏の大衆酒場で酒を呑みました。二人は詩誌「列島」の同志でもあり、久しぶりに会ったので、戦争時代に鳴海さんが憲兵に手荒い取調べをされた話や、浜田さんが軍隊の上官から酷く殴られた話などをして戦争時代の思い出を語り合っていました。フランス映画が好きで詩を書いていた二人の自由を求める若者が、どんな仕打ちをされたのかを私は傍らで黙って聞いていました。その時に私は二人の詩人を後世に残したいと心密かに誓いました。敬愛する二人とはそれぞれの自宅に行きよく酒を飲んでいましたが、三人で酒を飲んだのは最初で最後でした。柏駅プラットフォームでの見送りもとても印象的でした。成田方面に向う鳴海さんは、演劇学校にも通ったこともある演技でチャップリンのまねをして投げキスをして乗り込み、姿が消えるまで手を振り続けていました。浜田さんも少年のように満面の笑みを浮かべながら上野方面に去っていきました。私はこの光景を宝物のように記憶しています。彼らの詩的精神をこれからも引き継いで行きたいと願っています。今後とも宜しくお願い致します。

(拍手)

〈閉会の言葉〉

佐藤文夫 どうも、皆さん今日は長時間ありがとうございました。

講演をしてくださった三人の方々、ありがとうございました。

星清彦さんは福田律郎について大変詳しくお調べになって、この研究をまた今後に活かしていただきたいと思います。

上手宰さんは今日一番はじめてお話しづらかったらと思いますが、鳴海英吉さんのインタビューのお話が大変よかったです。

中津攸子さんは宗左近さんの人間としての側面、生き方感じ方などをお話くださりまして、いいお話でした。

それから十名の方々の朗読とスピーチもそれぞれ大変よかったですし、鳴海英吉は生きている、そして今日皆さんとここに参加してくれているんじゃないかと、喜んでくれているんじゃないかと感じさせてくださいました。本当にありがとうございました。

今日はこれで終わりたいと思います。

(拍手)